

あけのほし2013年5月

「復活によるゆるし」

菊田行佳

「さて、イエスがまだ話しておられると、十二人の一人であるユダが進み寄って来た。祭司長、律法学者、長老たちの遣わした群衆も、剣や棒を持って一緒に来た。…人々は、イエスに手をかけて捕らえた。…弟子たちは皆、イエスを見捨てて逃げてしまった。」（マルコによる福音書14章43、46、50節）

「こういうことを話していると、イエス御自身が彼らの真ん中に立ち、「あなたがたに平和があるように」と言われた。彼らは恐れおののき、亡霊を見ているのだと思った。」

（ルカによる福音書24章36節）

毎年教会では、復活祭（イースター）という祝祭を欠かさずに祝っています。よく知られているクリスマスよりもその起源は古く、キリスト教がこの世界に誕生してから、一番大切なお祝いとして捧げられてきました。この復活祭というのは、イエス・キリストが、当時の極刑である、十字架刑によって殺されたのですが、神によって三日目に死人の中から復活させられた出来事を祝うというものです。つまり、確かにイエス・キリストはこの世界の中で死んだのですが、神はそのままイエスを死の支配に渡しておかず、永遠に生きる新しいいのちを与えたのだということです。そして、このイエスに起こったことが、自分たちにも同様に起こるのだと信じた者たちが、教会を建てて、復活祭を祝ってきたのです。ですから、復活祭というのは、死に対するいのちの完全な勝利を祝う祝祭だということが出来るわけです。そして、今回は、そのような死者からの復活の喜びを、イエスに従っていた弟子たちの立場で、一つ考えてみたいと思います。

イエスの弟子たちは、最後まで従ってきたのは十数人だと考えられています。しかし、このわずかな弟子たちさえも、イエスが捉えられた時、皆逃げてしまいました。そのままイエスは裁判にかけられて、殺されてしまいますので、この弟子たちの逃亡は、直接イエスを見殺しにしたことになるわけです。まさに、イエスを一人犠牲にすることで、自分の命が助かったのです。弟子たちは、確かに命は助かりました。しかし、どうでしょう。自分が最も愛したイエスを見殺しにしてしまった彼らは、その後の人生を、まともに生きて行けるでしょうか。愛するイエスへの罪責の念が重くのしかかり、とても上を向いて歩いて行くことは出来ないでしょう。しかし、結論から言えば、この弟子たちは、再び立ち上がり、教会を建てて、イエスの意

志を引き継いでいったのです。ここにいったい何があったのか。

イエスが復活した後、この弟子たちの中に現れて、「平和があるように」と、声をかけたことが聖書に記されています。イエスは、自分を見捨てた彼らを責めるようなことはしなかったのです。平和があるようにと声をかける、つまり、彼らをゆるしたのです。そしてさらに大切なこととして、このゆるしの言葉を、イエス本人から言ってもらったのだということです。他の人から、いくら「きっとイエスさまはあなたをゆるしてくれるよ」と慰めてもらったとしても、ダメだったのです。つまり、見殺しにした本人が、死んだままではなく、今も生きていてくれるからこそ、彼らの罪責の念は取り除かれるのだということです。犠牲にしてしまった相手が、そのままでなく、新しいいのちを生きているからこそ、自分の罪から解放されるのです。

東日本大震災で津波に赤ちゃんを奪い去られた母親が、自殺を試みたということを知りました。彼女は津波の力の強さに、赤ちゃんを抱えていたその手を離してしまったとのこと。このことは、誰が聞いたとしてもこの母親を責めることなど出来ないものです。しかし、彼女からすれば、その子を見捨ててしまったのだとしか、考えられないのです。せめて、助けられないのなら、一緒に死んであげれば良かったのにと、自分を責めるのです。このことを聞いた自殺防止の相談員は、彼女の抱えている苦しみの深さに、何も言えず、ただ、一緒に涙することしかできなかったとのこと。

私は一人のキリスト者として、やはり、死者の中からの復活の使信をお伝えしたいと思います。イエスをそのまま死に引き渡しておかなかった神は、そのいのちの力で、必ずやその赤ちゃんに、新しいいのちを与えてくれているはずだと、お伝えしたいと思います。そのことだけが、彼女の重い罪責の念を、取り去ることが出来るのだと信じるからです。

イエス・キリストの弟子たちも、「今もイエスさまは生きてるのだ」と、信じるからこそ、再び、立ち上がったのです。もしそうでなければ、どんな慰めを聞いたのだとしても、決して自分をゆるせなかったことでしょう。他のすべての人からゆるされたのだとしても、自分が、自分をゆるせない限り、癒されることはないのです。

私たち人間は、たとえ誰かにゆるされたのだとしても、決してぬぐい去ることの出来ない重荷を抱えているのかもしれない。それがたとえ神であったのだとしても。やはり、その自らの行動の結果が、解消されない限り、本当の意味では、ゆるされないのだということです。そういった意味では、この死者からの復活の使信だけが、私たちを罪責の苦しみから解放させてくれると言えるのだと思います。自分がたとえ壊してしまった相手の人生であっても、いつの日にか、神はご自分の御許で復旧してくれるのです。そのことを信じるのが、自分を責めることから、私たちを抜け出させてくれる道なのだと、言えるのではないのでしょうか。